

## 第13回歴史まちづくり協議会での主な意見と対応案について

番号	項目	内容	対応案	対応資料
1	10年後の目指す姿について	・10年後の目指す姿について、具体的な取組みを見える化することが必要。	・イメージ図のなかに事業を追加し、具体化を図ってまいりたい。	資料No,2-2 P4
2	伏木と吉久の風致について	・伏木と吉久を同じ風致エリアとしているが、両地区ではまちの性質が違うのではないかと。	・伏木は、北前船で栄え、日本海側有数の港として発展してきた。一方、吉久は、小矢部川を挟み、伏木の対岸に位置しており、加賀藩直営の御蔵が置かれたことや小矢部川や庄川を下って運ばれてくる米の集散地であったことなど、伏木港から廻米として積み出される玄関口であった。第1期計画では、どちらの地区ともに小矢部川を利用した水運があったからこそ発展してきた地区で、港町という観点で一体的に考えており、第2期計画でも同様に一体的なものとして位置付けたい。	資料No,2-2 P2
3	北部地域の強化について	・吉久が重伝建に選定されると、町並み保存が進んでいくと思われるが、伏木ではかなり行政が支援しないと進まないように思う。修理に関するものなどの補助制度をうまく活用できるようになれば良くなると思う。また、伏木気象資料館も完全復元を目指せば良いものとなる。	・歴史的風致を構成する建造物について、歴史的風致形成建造物に指定すれば、市内町家等再生事業等の事業化が図れるため、所有者等との調整を図りつつ、進めてまいりたい。 また、伏木気象資料館は、平成26～28年度に伏木気象資料館復原修理事業を実施し、塔屋の復原は達成されたが、その際の調査で判明した過去の痕跡である塗装や建具等の細部全てを復することができていないため、今後施設の利用促進・維持管理を進めながら事業化の機会を図りたい。	資料No,2-3 P205
4		・北部地域(万葉集)を強化するとすれば、家持が歌を詠んだ小矢部川や万葉歴史館の機能充実の取組みと関連する場所を整理することも重要であると思うので、それらを歴史的風致として捉えてはどうか。	・本計画における歴史的風致は、建造物等と一体的に形成された人々の活動が必要であることから、歴史的・地形的な背景を鑑みて二上山丘陵を捉えて歴史的風致の設定を行うことを考えている。	資料No,2-2 P2
5	事業について	・本計画の予算に関し、調査事業の予算はどう考えているか。例えば、高岡の鑄物関係では、市外・県外にも関連の資料は多い。これらは、既存の事業で実施しては十分な調査ができない。本計画に位置付けるならば、しっかりと調査費を計上し、広範囲に調べて資料収集を行うべきと考える。	・鑄物資料に関しては、鑄物資料館にある資料のほか、市内に眠っていた資料のうち博物館に寄贈などされたものがあるため、まずはその調査・分析を進めていきたい。また、調査にあたっては既存の予算で対応するのではなく、しっかりと事業化し予算を確保した上で進めたい。	資料No,2-3 P144及びP155
6		・大伴家持の歌を石碑にして勝興寺だけでなく氣多神社も含めた北部地域に散りばめて回遊性を高めるといった事業を入れてはどうか。石碑でなくとも木柱で事業化することも検討されたい。	・第2期計画では、ストリート構想の実現に向けてAR技術を用いた事業を実施することとしている。まずは、勝興寺周辺で実施し、その効果等を検証したうえで、氣多神社等を含めた範囲に拡大していきたい。また、石碑については、既に伏木地区内に分散しており、万葉歌碑マップとしてまとめられたものもあるため、それらを活用してまいりたい。	資料No,2-3 P224
7	伝統工芸技術の継承について	・伝統工芸技術の継承はかなり難しい。 ・従来の政策で実現可能とは思えないが、流通まで踏み込まないといけないのではないかと。	・伝統工芸技術の継承や伝統産業等の流通については、本計画のほかに個別計画として、産業振興ビジョンのなかで議論されており、「次世代への技術の継承」として伝統的な技術の継承や後継者・人材の育成や「地場産業・伝統産業のマーケティング強化」として新製品の開発や販路開拓支援を施策として位置付け、これまで展開してきた。 現行の産業振興ビジョンは今年度で期間が満了になることから、新たなビジョンを策定することとしており、そのなかで、次世代への技術の継承やマーケティングの強化について議論し、引き続き、施策として位置付け、事業者等と連携しながら取り組んでまいりたい。	
8		・祭礼行事の継承と伝統工芸産業が併記されている箇所が見受けられるが、御車山修理などの文化財の保存においては、産業と直接結びつくのではなく、伝統的工芸の継承と結びつくため、表現を見直されたい。	・伝統工芸産業ではなく、伝統工芸技術の継承に文言を修正。	資料No,2-2 P1
9	その他(文言について)	・第2期からは古代に遡って歴史的風致を取り組むことになっているが、用語と言葉遣いを変更していかないといけない。 ・旧北陸道と記載すると、古代は「ほろくどう」の官道との違いを明確にしないとけないし、菅笠関連となると時代的には北国街道と言うことが適当である。古代の歴史まで遡ると北陸道は国府から石堤を通って、福岡に行く道も対象となる。また家持が通ったと思われる場所も対象とすることも考えられ、どのあたりまでを取り扱うかについて議論が必要である。	・歴史的風致の名称については、1期計画と同様に「旧北陸道」とし、文中に出てくる「北陸道」と「街道(北国街道)」について補足説明を加えることで、錯誤がないようにしてまいりたい。	